

## 論文要旨

**研究目的:**本研究は、在宅療養する慢性心不全をもつ高齢への在宅モニタリングに基づくテレナーシングを提供することによる対象者の自己健康管理意識の変化や反応を示し、テレナーシング導入初期の看護介入について検討することを目的とした。

**研究方法:**本研究は、テレナーシング開始から4週間(28日間)在宅療養する慢性心不全をもつ高齢男性1名を対象とした事例研究である。日々の心身データから対象者の変化を量的に分析し、対象者の開始時と4週間後の取り組みを半構造的インタビュー調査し、看護内容はフィールドノートを作成し、コード・カテゴリ化し分析した。

**結果:** I.在宅モニタリングに基づくテレナーシングの成果は、開始後4週間(28日間)の心身データ送信率は100%であった。主観的自覚症状(VAS-10)の4週間の平均値( $M$ )は9.61で、1週目( $M=9.00$ )より、2週目( $M=9.57$ )、3週目( $M=9.86$ )、4週目( $M=10.00$ )と平均値が有意に上昇した。Borgスケールスコアは、1週目( $M=0.07$ )より、2週目( $M=0.35$ )に悪化した。3週目以降は( $M=0.00$ )に改善した。初期に設定された対象者の目標は、4週間後到達された。 II.対象者の自己健康行動の思いの変化や反応は、テレナーシング開始前のカテゴリは【自己健康管理に関する思いと行動】、【テレナーシングによる自己健康管理行動に関する思い】の2カテゴリで、【自己健康管理に関する思いと行動】は11サブカテゴリ、【テレナーシングによる自己健康管理行動に関する思い】は2サブカテゴリであった。4週間後のカテゴリは、【自己健康管理に関する思いと行動】、【テレナーシングを受けたことでの変化と受け止め】、【端末操作に関する思いと事実】の3カテゴリで、【自己健康管理に関する思いと行動】は5サブカテゴリ、【テレナーシングを受けたことでの変化と受け止め】は3サブカテゴリ、【端末操作に関する思いと事実】は2サブカテゴリであった。 III.在宅モニタリングに基づくテレナーシング導入初期の看護支援は、5カテゴリとなり、【テレナーシングの面談における看護支援】は5サブカテゴリ、【受信データ全体を把握し、健康状態をアセスメントし、対応を検討する】は4サブカテゴリ、【心不全徴候をアセスメントし、対応を検討する】は5サブカテゴリ、【テレナーシングによる電話による看護実践】は6サブカテゴリが得られた。

**結論:**本テレナーシングは、28日間の健康状態の安定的維持と対象者の主観的自覚症状(VAS-10)の好転、テレナーシングシステムの使用継続と対象者の目標達成がなされたことから、導入初期におけるテレナーシングは健康状態維持に有効であることが示唆された。